

神の痛みと教会
(マタイの福音書20:36～46)

2016年 8月 21日 聖樂教会 主日礼拝 説教録取

説教: 監督 ^{キムソンヒョン}金聖顯牧師

永遠の父でおられる

神は

みずぼらしくて罪深い被造物に過ぎない

私たちを生かすために、

永遠に自分とひとつである御子を犠牲にされた(ヨハネ10:30)

神は御子を死なせなければならないという

大きな痛みを経験しなければならなかったし、(創3:15)

御子も私たちを生かすために自分の命を差し出して

十字架の道を歩まなければならないという

大きな痛みをもたれた(マタイ26:38)

神の痛みによって

私たちは

永遠に痛むことがない

身分と未来をもった(ヨハネ1:12)

イエス・キリストの教会である私たちは

主が痛みをもたなければならなかった

この地にとどまる間に、

すなわち、この危機の時代が過ぎるときまで、

主に向けられた恐れと感謝の心を

一時も捨ててはいけないし、

また、その方の痛みが

私たちの教会の偉大な救いと

永遠の力となるようにしなければならぬ(ヨハネ3:16)

そのためには私たちもともに十字架を負わなければならない(ルカ9:23)

聖徒のための愛と犠牲は

私たちの本分である

物質世界を超越し、

主の教会の成功のために

ひとつになろう

私たちに訪れる困難を

克服する信仰をもとう

私たちはともに主の痛みを

栄光と感謝をささげよう

憐れみを施された神の痛み

神は恵み深い方でおられます。神はその恵みを他の被造物に与えないで、ただ人間にだけ与えられました。神の恵みは他の言葉で説明すると、憐れみ、あるいは慈しみということが出来ます。憐れみと慈しみはそれを施す者の犠牲を前提にします。私たちのために自分の最も貴いものを犠牲にされた神が私たちの父です。私たちがこの世で体験する父の姿は完全な父の姿とは距離があります。ただ神だけが永遠で完全な私たちの父でおられます。私たちはその方が施してくださった恵みによって神の子となりました。それゆえ、これからは神の子としてふさわしい姿を備えなければなりません。私たちに憐れみと慈しみを施してくださった父なる神の心を痛めつけてはいけません。

神の恵みを知るといえるのは神の痛みを知るといえる意味を含んでいます。神の痛みを知るといえるのは神の憐れみを知るといえることと同じです。神の恵みと神の痛みと神の憐れみ、これら3つの要素は同一線上にあります。それゆえ、これら3つの要素を同時に知ってこそ、神の恵みを知るといえることが出来ます。また、これに追加しなければならない要素がありますが、それは持続性です。神の恵みは一時期だけ存在して消えるものではありません。神の恵みは永遠です。

神の恵みを語る前にまず神の痛みを知らなければなりません。神がイスラエルを自分の民とされた過去を振り返ってみましょう。神はイスラエルの民を愛されました。しかし、イスラエルの民は神を裏切って他の神々に仕え、それによって神の心を痛めつけました。義なる神にとって罪悪に対する怒りは職分、すなわち任務です。それゆえ、神がイスラエルの罪悪に怒るといえるのは自然なことでした。しかし、神は怒りと憐れみの間で悩んだのちに結局、憐れみによって自分の民を治められました。ここで注目しなければならない事実があります。それは「神にとって罪に対する怒りはその方の任務であるが、憐れみは神が自ら価を払わなければならない大変な犠牲である。」という点です。

イスラエルの民は絶えず神を裏切って離れ、それによって神を痛めつけましたが、神は怒りと憐れみの間で苦しみました。これは旧約聖書を通してすぐに発見することができる事実です。感謝すべきことは「怒りと憐れみの間で葛藤が生じるたびに、神は常に憐れみを選ぶことによって民を回復させることを願われた。」という事実です。

このような神の心はホセア書 11 章を通して確認することができます。神はイスラエルに「私があなたがたを子としたが、あなたがたは私を痛めつけた。それゆえ、滅びがあなたがたに及んだ。」といわれましたが、突然、「エフライムよ。私はどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。あなたを見捨てることができようか。それはできない。私の心は私のうちで沸き返る。私は燃える怒りで罰しない。」と心を変えられました。ゼパニヤ書を通してこのような神の姿を見ることが出来ます。ゼパニヤ書 1 章から 3 章 8 節までは神を敬わない者をすべて滅ぼすと警告されましたが、3 章 9 節からは突然、「イスラエルよ。喜び歌え。エルサレムよ。喜び叫べ。私はあなたを苦しめた者をすべて罰し、全地でその名をあげさせよう。」といわれました。神は罪から脱け出すことができない民を見て、このように心を痛めて耐えなければなりませんでした。

私たちのために自分を捨ててくださった御子の痛み

このような状況は国が滅び、バビロンに連れて行かれた民が再びエルサレムに帰って来たのちにも続きました。神の働きは旧約聖書の最後の書を記録した預言者マラキののちに見えなくなりました。それから 400 年後にイエス・キリストがこの地に現れました。その当時、ユダヤ人が待ち望んでいたメシヤはローマの圧政を受けていた国を回復させる政治

的な人物でした。しかし、イエスはそのような方ではありませんでした。イエスは人間に向けられる憐れみをもって来られた方でした。イスラエルのためにだけでなく、全人類に憐れみを施すために来られた方でした。

神がご覧になるときに、人間にはもう望みがありませんでした。律法によって訓練されたイスラエルとユダを見ただけでもそうでした。彼らは神の民という名札はつけていましたが、むしろ誰よりも罪悪によって神を痛めつけていました。イエスはそのような人間のために「彼らの罪を私が代わりに負おう。」とあって、この地に来られました。誰でもその方を頼って罪の問題を解決し、この地での危険な時期を無事に通り過ぎるようにされたのです。それゆえ、今は誰でもイエスの中に入って来なければなりませんし、その方に仕えなければなりません。

神は私たちのために自分を犠牲にされました。神としての独立した道を犠牲にしてでも私たちと永遠にともにする道を選ばれました。イスラエルによって常に痛みつけられたにもかかわらず、人類を赦して神の子とするためにさらに大きな痛みをもとうとされました。しかし、神が払わなければならない価は非常に大きいものでした。神のふところにあった御言葉が人の子としてこの地に来て苦痛を受け、結局、十字架につけられて死ななければなりません。その方が経験されたのは肉体の苦痛だけではありませんでした。その方は人々から憎しみと無視を受け、あらゆる心の傷を担わなければなりません。

御子の死をご覧になる父の心情、また、御子の心情はどのようなものであったのでしょうか？ イエスは「まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみ実です。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。今、私の心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ。この時から私をお救いください。』」といい(ヨハネ 12:23~27)、苦痛の中で悩む自分の心を吐露されました。しかし、その方は「いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。父よ。御名の栄光を現わしてください。」(ヨハネ 12:27~28)といわれました。父の御名に対する愛によってイエスは恐れと痛みで勝利することができました。

このようなイエスの祈りに天から「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。」(ヨハネ12:28)という応答がすぐに来ました。周りにいた人々が雷なのか、天使の声なのかと考えたときに、主は「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」(ヨハネ12:30~32)といわれました。このとき、人々はモーセが青銅の蛇を旗ざおの上につけた場面を思い出したでしょう。イエスがこのように語られたのは自分がどのような死に方によって死ぬのかを見せるためでした(ヨハネ12:33)。

主はゲッセマネで祈ったときに、弟子たちに「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、わたしといっしょに目をさましていなさい。」(マタイ26:38)といわれました。その方は苦しんで、同じ内容をもって三回も祈られました。しかし、祈りを終えたのちには平安な姿で「時が来ました。さあ、行くのです。」といわれました。そののちに、イエスはピラトの法廷に立つようになりましたが、ピラトはその方からどのような罪も見つけることができませんでした。それにもかかわらず、群衆は囚人であるバラバを釈放し、イエスを殺すように叫びました。このように主は死の瞬間に向かって歩いて行かれ

ました。イエスは人類を救い出すために言葉によっては表現することができない極端な痛みを経験されました。

神の痛みを知る者

人の子がこの地に来られたのは仕えるためでした。その方が仕えるために来られたというのは他でもなく多くの人に自分のいのちを贖いの代価として与えるために来られたということでした(マタイ 20:28)。ある人は癒しの力を過度に強調し、イエスがこの地に癒しの力を伝えるために来られたといます。しかし、ただ癒しの力のために来られたのであれば、イエスが殺される必要はありませんでした。神が御子を差し出すという大きな代価を払ってまで成就しようとされたのは罪によって死ぬしかなかった私たちを生かすことでした。

それゆえ、私たちは自分を義なる者と考えるはいけません。主は「義と認められたのは『私は取税人と異なり、義なる者です。』と祈ったパリサイ人ではなく、『私は罪人です。私をあわれんでください。』と祈った取税人である。」といわれました(ルカ 18:9~14)。また、主は取税人や罪人と付き合うこと自体を不義と考えたパリサイ人に「『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」(マタイ 9:13)といわれました。イエスが私たちの代わりに死なれたのは私たちを憐れんでくださったためです(マタイ 18:27)。

神の痛みは私たちが恵みを受けた瞬間になくなるわけではありません。神の痛みは終わりの日まで続きます。私たちが罪を犯したときに神は苦しめられますし、私たちが教会を愛さないときにも神は痛めつけられます。献金するときに誠意を尽くさないこと、十分の一を無視すること、教会よりも自分を大事にすること、これらによって神の心はさらに痛みます。キリストによって恵みを受けた私たちの本分はキリストの教会を愛することです。私たちは恵みに感謝する心をもってこの本分を守らなければなりません。神の恵みと愛、憐れみと慈しみを忘れないのがキリスト者としての正しい姿勢です。

キリスト者の姿をもつためには訓練が必要です。エペソ人への手紙 4章 29~32 節の御言葉のように、悪い言葉を口から出してはいけませんし、ただ人の徳を養うために役立つ言葉を話して人々に恵みを与えなければなりません。聖霊によって印を押されたので、救いの日まで聖霊を悲しませてはいけません。将来の救いの日まで私たちは無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしり、悪意を捨てて、憐れみをもって互いに親切にしなければなりません。神がキリストの中で私たちを赦してくださったように、私たちがキリストの中で互いに赦し合わなければなりません。

神の御子は私たちを救うために直接、痛みを受けられました。また、父なる神は私たちのために十字架で死んでいく御子を黙って見守りながら痛みを受けられました。神の恵みを言及するときに、私たちは必ず神の痛みを覚えなければなりません。そして、二度と神を痛めつけないと決心しなければなりません。私たちが教会であるのなら、当然にそのようにしなければなりません。救いの日まで神に感謝する者、忠実に神を喜ばせる者、神を愛する者とならなければなりません。神の恵みを受けた者としての礼を尽くさなければなりません。

救いがすでに完全になされたと考えるのは誤解です。パウロはテモテに書いた手紙で「父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。」(Iテモテ1:2)といいました。キリスト者であるのなら、当然にこれらを維持

しなければなりません。自分がこれらから離れないように常に恐れをもたなければなりません。聖書は私たちに「永遠のいのちに至らせる、私たちの主イエス・キリストの憐れみを待ち望みなさい。」(ユダ21)といたしましたし、「終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。」(Iペテロ1:5)といたしました。また、「あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。」(Iペテロ1:17)といたしましたし、「恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」(ピリピ2:12)といたしました。それゆえ、私たちは神に向けられた感謝と謙遜と忠誠を止めないで、主の教会によく仕えなければなりません。この世が与える痛みを受けるときに、私たちのために痛まれた神の御前で墮落した姿を見せてはいけません。

キリスト者は神の恵みを伝える者です。神の恵みを伝えるというのは概念を伝えるということではなく、神の痛みを伝えるということです。神の憐れみに隠された神の痛みを知らないまま、神の恵みを語るのは不可能なことです。神の恵みを知る者、すなわち神の憐れみと痛みを知る者となりましょう。生涯、神の痛みを伝える者となりましょう。

翻訳：聖樂教会 聖樂宣教センター 日本語翻訳室